

別れの日々

脆くはあるが暗くない

(選50編)

伊規須太郎

別れの日々

脆くはあるが暗くない

(選50編)

障害を持つたら

障害を持つたら……

「障害」という字が 私のがわに立つようになった

障害を持つたら……

創造のすばらしさを知った

障害を持つたら……

工夫することを覚えた

障害を持ったたら……

人間のすごさを知った

障害を持ったら……

「これも悪くないな」と思った

(注) 一九九四年、左腕橈骨神経麻痺のため「垂れ手」となった

(一九九四年一二月)

わかれ

私のために 掛けがけのない一人の魂が
神様から遣わされ そして帰って行つた
すべてを忘却のあなたに残して……

六五年まえ 彼女が地上に迎えられたとき

私は知らなかった

彼女は晩年 少しばかりの戸惑いがあったが

この世の一切の煩いから離れて ハッピーだった

暮れて行く光の中で　ただ

世の終わりまで共におられる主　を頼みとして
残された者に　ちよつぱり塩辛い思いがあるが
受けるより与える方が幸いだった　と思う

知り合つて四六年　結婚して三七年

貴重な体験をさせてもらつて　ありがとう

さようなら　ヤスコ！

今度　主の前で会うときは　お互い天使のようだからね

夫婦よりも　ずっと素晴らしい関係に違いない

君が強かつたから　この賜物を頂いたのか

私が弱かったから あわれまれたのか

それは 神様だけがご存じである

永遠より永遠に至るまで

すべてのものをしろしめす 主の御名はほむべきかな！

(一九九七年四月一九日)

ぼうずめくり

字が読めない家内は カルタとりに加われない

やさしい寮母さんは ぼうずめくりを用意して下さった

これなら「いいよ」とか「アハハ」と言っていればよい

そのうちみんなが「いいよ」「いいよ」と言い始めた

思わず笑ってしまった

寮母さん ありがとうございます

(一九九八年一月二二日)

解禁

痴呆三部作と言われる名映画を作ったH監督

十年前に先駆的な取り組みをした

熊本のX病院……

第一作はその病院を舞台に撮影された

しかし その素晴らしい映画を

熊本では永久に上映させないという

九州でも自分のあいだダメという

いつまでと問うと 無期限らしい

後ろ姿しか映っていないなくても

アッあの人だと 特定されたら困る

何としても隠したい 恥ずかしいという訳

隠したいと思っている人の所には

向こうからやって来ますよ

カゼをひいたら恥ずかしいですか？

病気だったら恥ずかしいということなんかじゃないじゃないですか

(一九九八年三月二四日)

迷子

「田舎から来た野菜をあげるから来て」と電話

泰子は自転車ですぐに出かけた……が

なかなか帰らない

往復四十分もかからない筈なのに

二三日月後 今度はなかなか行き着かなかった

態度がおかしかったが 品物を渡した

すると家に帰り着かなかった

友人は心配してタクシーでうちまで来たが

どうしようもない

ずいぶん長い時間がたって

汗ビツシヨリになって帰って来た

「〇〇まで行った」と言うが とんでもない方角だ

本当かウソか分からない

数年前 小倉南区の友人宅に行けず

大笑いになった とあとから聞いた

……知らなかった

マダラとはある時期の頭の中の状態の事もあれば

時間軸上のマダラのこともある

(一九九八年五月四日)

お尻ふき

ほとんど破れるまで

キユツキユツと拭きあげていた

もう少し工夫したら と思うが

そこまでは確かめられないし 言えない

トイレットペーパーもたくさんいる

温水洗浄（便器）になつてからは

それが解消した

しかし紙は使っていたようだ

いままた特養ホームでは 温水洗浄でなくなった
どうしているのだろうか？

寮母さんの悩みの種は

トイレットペーパーが

すぐ無くなる事です……という

(注) 懐紙として巻き取る人が多いようである

(一九九八年五月四日)

入浴準備

(在宅時代のこと)

シャワーを浴びようとして

服を脱ぎ 着替えを揃えていた

衣服箱は一か所しかないのに

片手にシャツをかかえて

アレーツアレーツと 十五分もウロウロしている

しかしちよつと声を掛ければ何とかなっていた

(一年以上たった)今でも 運動機能は

ほぼ保たれているが 司令部は徐々に弱っているようだ

ある夜 パジャマの着替えを見ていると

いま着ているものを脱ぐのに だいぶ考えていた

廊下に出たから お尻まる出しで

ズボンを まえうしろに 履きかえた

ホームの入浴に立ち会った事はないが

寮母さんに

相当ご迷惑をおかけしているに違いない

(一九九八年五月四日)

コトバ

耳を失った人は 見る（目で読む）事ができる

目を失った人は 聞くことができる

目も耳も失った人は 触れることができる

まばたきでワープロを打つ人もある

しかし脳を失った人は コトバを失う

視覚・聴覚・触覚が完全でも

体はピンピンしていても

発声器官には 何の欠陥が無くても

コミュニケーションは失われる

コトバを造ることができない

コトバを理解することができない

文盲とは違う

かつては立派な言語生活を送った人だ

コトバを失った人間とは何だろうか？

(注) 失語症には二種類あると言われます

(一九九八年五月五日)

死亡通知

旦那さんが亡くなったのに

奥さんに知らせん事があるか！

と 常識人に頑張られると困るのです

家内は違った世界に生きています

私の死んだ事を知らせても

事の真相を理解できないで

戸惑うばかりでしょう

家に帰っても 喪主が務まる訳じゃなし

みなさんに ご迷惑をかけるだけです

(隠す気持ちは まったくありません)

黙ってれば 自然に忘れるでしょう

この頃 面会に来ないね

と感じるようであれば 上等ですが

それは無いと思います

これだけは みなさんに

よくよく お願いしておきます

いろいろお世話になります よろしくお願い致します

(一九九八年五月三〇日)

勝負

ボケとイビキは 早いが勝ち という

彼女が元気なころ 私は身辺整理をしていた

六歳若い彼女が 多分残るだろうと思ったから

第一次（死亡）連絡先が二二箇所あった……

教会関係の書類 個人関係の書類 それぞれの保管場所

むつかしいものは 簡単な説明を付けた

定期購読物 継続している諸契約・援助など

やりかけの主な仕事・原稿など

OA機器・工具類・参考書などの処置案

末期医療に対する希望

遺体の処置について

特に祈るべきこと（人）……などなど

ところが彼女が早かった 勝ったのかも知れない

私は負けてよかった……もし逆だったら

彼女に大変な重荷を負わせるところだった

結婚式の誓約文に 愛・慰・敬・護・命がある

私はいま 第四・五を実行しつつある

（一九九八年六月二二日）

音ズレ

久しぶりにカラオケ練習に同行した

寮母（看護婦）さんは 泰子に歌わせようと一生懸命

マイクを持ち 肩をたたきながら 一緒に歌って下さる

曲は「上を向いて歩こう」だった

口はパクパクしているが 彼女の声は聞こえない

音ズレしたビデオを見るようだった

画面ともズレ 文字も読めないのに

何を思っ て あんなに口を動かしているんだろう

ときどき 動きが合ったかな と思う時もある

しかし 相変わらず声は聞こえない

看護婦さんは 声を出るようになりましたと言われる

介護の成果は大感謝だが 全体として下降傾向は変わらない

「まだ半分」か「もう半分」か という話がある

自分のからだが 変質しつつあるとき

このウズキは 私には分からない

何と言ったらよいか……痴呆の恐ろしさがここにある

(一九九八年七月六日)

降段

一〜二ヶ月前から レベルが下がったと感じていた
係長もそう言われたが 表現は婉曲だった

七月九日夕 係長から ちよつと……

と言われたような気がして 物陰に行く

しばらく前から失禁が始まっています

私たちも進行が早いのに驚いています

頻繁にトイレに座るが 出た形跡がない

そしてパンツの中に漏らします 大もそうです
ベッドに（防水）シーツを敷くと のけてしまうので
別に対策を考えようと思います と

排泄には筋肉を動かす要領がある

それを忘れたらしい

下半身が濡れた不快感も鈍くなったようである

よい介護の結果 平穩に過ごせる事は大感謝だ

しかし 脳の老化・退化はとどめようもない

覚悟はしていたが いよいよ瀬戸際にさしかかった

（一九九八年七月二九日）

失禁

オシッコやウンチをするときに

考える人はないと思うでしょう

しかし①一杯になったと感

②排泄しようと思える

③括約筋をゆるめる

④腹圧をかける

これだけの事をしているのです

ところが痴呆の人はまず

①の感覚が鈍くなります 感じた時は間に合いません

②今してよいのか いけないのか

場所はここでよいのかどうか……判断ができません

③④は何十年もやってきたこと……と思います

要領があります それを忘れているのです

だからオシッコもウンチも

自然にオーバーフローすることになります

オシメの中が濡れても 異物がモコモコしていても

ほとんど感じなくなります それが痴呆の失禁です

(一九九八年八月三日)

オムツ

三年前 泰子は八日間入院して白内障の手術を受けた
手術当夜はオムツをした 私はベッドの下で寝た

彼女は翌朝までガマンして 一度も排尿しなかった

入院前 練習を勧めたが 絶対しなかった

その泰子が いま 排泄をコントロールできない

尿・便意の感度がどれくらいか分からないが

便器に座っても 出しかたが分からないし

(便所外で) アツと思つても 止めかたが分からない

オムツが湿つても 重くなつても

ほとんど感じないようである

人間は二度オムツをする

生まれてしばらくと 死ぬまでしばらくである

赤子について 人間の尊厳が失われたとは言わない

老人も 自分の責任でそうなのではない

尊厳には別の物さしがあつてもよいのではないだろうか？

(一九九八年八月二〇日)

けむり

駐車場を出るとき チョット迷って

左にウインカーを上げた

新門司インターまで 裏道を行こうと

思ったからである

すると 南風に乗って

かなりの煙が 左から右に流れていた

ハツとしたが すぐ治まった

なーんだ……老人ホームで火葬なんか

する筈がないじゃないか……

あれば ゴミ焼却炉だろう……

しかし 霊安室はどこかにあるかも知れないな

さつき職員の方々と 「長い別れの日々」の

話をしたばかりだった

「彼女を残して死ねない」と 堅く考えていたが

この四・五日寝付いてみると 「これは分からない」と

思うようになった

K弁護士事務所に 後見について相談に行くつもり

……私の後見も考えねばなるまい

(一九九八年八月二〇日)

「老」富豪

年をとった お金持ちではない

「老い」に富む人である

ある人は「老いに恵まれた」と言い

またある人は「老人力」と言った

私は「痴呆」の富豪になった

振り返ると 数年前から大変な勉強を強制された

楽ではなかったが 今では多くの単位に恵まれ

家内にとつても 私にとつても

悪くない事であつたと思つている

痴呆は神様の賜物ではないだろうか？

本人はこの世の一切の煩いから解放された

わたしは老いの勉強をし 優しさを学んだ

それをなんとか発信しようと心掛け

話もしたし書くこともした

すると多くの所からお声がかかった

発信することで 崩れやすい自分の心も支えられた

(一九九八年一〇月一日)

泰子

泰子はもう帰って来ない

帰って来ても　ここで生活できない

帰って来ても　いる所がない

帰って来ても　元の彼女ではない

彼女は遠い遠い所にいる

新門司まで二五キロという意味ではない

住んでいる世界が　異なってしまった

ある人は異星人と言った　何光年さきか分からない

かつてユキエという映画があった

キーワードは *Slow-Good-bye* だった

私の詩集の題は「別れの日々」といい

副題は〈脆くはあるが暗くない〉である

「別れの日々」がどこまで過ぎているかは分からない

介護専門家は若年性のガンが進行するように

若く始まった痴呆は 進行が早いかも知れない

伊規須さん（泰子）は急速にレベルが下がっていると云う

私の知る限り 泰子より三歳下の人が一人いる

（一九九八年一〇月一日）

五秒

十月に入ったのに その日はまだ暑かった

夕食のお茶は冷茶だった

泰子はユノミにお茶をついで配る役だった

給茶機の下にユノミを置いて レバーを押さえる

一杯になったユノミを横にのけて

次のユノミを置く……その間 約五秒

もうレバーの押し方を忘れ どうしてよいか分からない

ずつと付き添って介助されている係長が

ハイここを押さえて と手を持って行ってやると

押すが……次はもう忘れている

何回 注意・指導を受けただろうか？

やつと十杯つき終わった

お盆に載せて食卓まで運ぶ……これも難しい

一度に二つ以上の指示をしても理解できない

次々にユノミを置くのも スムーズには行かない

放置しておくよ 二・三コ置いてどこかに行ってしまう

たえず目配りと指導が要る……大変である

(一九九八年一〇月二日)

鏡台

一人暮らしになり 泰子は再び帰らないと分かってから
家の中を懸命に整理し 改造に努めた

少しでも労力を減らし 効率的に生活するためである

小作業もあつたが 凄いだ作業もあつた

こんなに重く大きな物をどうやって一人で動かしたか

いま振り返って 不思議に思ったり

危険にゾツとするものもある

板張りのフロアの南東側に

大きなハンガーコーナーを作り 衣服を沢山吊したので

泰子の鏡台は 一番奥になってしまった

何かの整理のついでに 久し振りに隅々を掃除しようと

鏡台に近づくと 床に白い粉が降り積もっていた

引き出しの左下端が すっかり虫に食われて

皮ばかりになっている！

わずか一八ヶ月のあいだに

こんなにも廃墟になつてと思うと……グッと来る

私の心も崩れて行くような気がしたが……持ち直した

(一九九八年一〇月一三日)

濡れ色

辞書をひくと 水に濡れたような色……

「濡れ色に咲くやまぶきの花」などと書いてある

「お漏らし」と「失禁」は違うと言われる

前者は「間に合わなかった」「しまった」と少し漏らす

後者は 感覚が無くコントロールも出来ないから

気持ちよくなるまでシャーとやってしまう

泰子は残念ながら後者である

何度も現場を見たが

服地によって水のしみ易いものとそうでないものがある

ある入浴日の午後 後ろ姿を見てアツと驚いた

ズボンの裾まで ジッポリと濡れている

最も目立ちやすい生地だった

寮母さんに告げると アツという顔をした

フロから上がってすぐだったからである

またある日は 椅子から立ったあとが濡れていた

「アツ今日は三度目」と言った

それは非難ではなく 私に知らせてくれる言葉だった

(一九九八年一〇月一三日)

歯みがき

歯ブラシの柄には各自の名前が書いてある

寮母さんは それぞれにクリームを付けておく

「さあ歯磨きをしてくださいーい！」と言っただけで

順調にすむ人は少ない 一人一人観察しながら繰り返し返す

「すみましたか」「ハイ」と返事が来ても

信用はできない クリームの残っている人はまだである

ある日の夕食後 泰子は係長と一緒に歯磨きをしていた

ゴシゴシやっているが 下歯の噛み合わせ（上）面ばかり

せめて上歯の前（面）もと思うが ひとりでは出来ない

介護者が歯ブラシを取って 上歯をコサグと

少し出血した……ハハー痛いからしなかったのかな？

それまで すんだような顔（や返事？）にだまされて

長いこと不十分だった 口臭に気付いて歯槽膿漏を疑い

歯科に連れて行こうとしたこともあった

ハイ グチュグチュ ペツして……と言うが

ジーツと考えているうちに……飲み込んでしまった！

ある時はホツペタをふくらませたまま ウロウロした

クリームはなるべく少し付けるようにしていますと言われた

（一九九八年一〇月一六日）

降段④

泰子は夕食後テレビの前に座っているが 落ち着かない
しきりに手をこすり合わせている 濡れているようだ？

手を匂うと ウーム煮魚をつかんだような匂い？

ハテ何だろう???…考えても分からない

立ち上がったあとを見ると 坐面が濡れている

アツと お尻を見ると三角形にシミがある

オシッコなら下のほうに流れる筈だが????

トイレ徘徊しているので ついて行くと便器を指差す

蓋をあけて見ていると 下痢便が少しあつた

寮母さんがオムツを見ると 下痢便を漏らしていた

すつかり拭き上げて パジャマに着替えさせて下さつた

緩下剤は半量にしましょうと言われた

(推測) 便秘になると大変だから緩下剤を飲ませる↓利き過

ぎて軟便となる↓漏らしたのに気付かない間に皮膚炎を起こ

す↓座つて少し排泄した↓パンツを履いたが気持ちが悪いの

で手を入れた↓手の洗いが分からずコスリ合わせていた？

横になりかけていたので 毛布を掛けようとする

片足は (室内) 靴をはいたままだった

(一九九八年一〇月二〇日)

徘徊

徘徊と言っても いろいろあるようだ

(施設内の) 日常生活空間であれば それほど問題はない

回り廊下であるから 無限に歩くことができるし

どこにいても ガラス越しに大体見ることができる

問題は非日常の場合である たとえば(園の)前庭……

高い塀で囲まれた中ではあるが 手に負えなくなる

先日 ソーメン流しがあった 職員たちが忙しくて

ちよつと目を離れたスキに どこかへ行ってしまうた

慌てて探し回ると 高塚の行き止まりまで行っていた
連れ戻したが 職員が付き切りという訳には行かない
アツという間に またいなくなってしまった

また探して連れ戻す 結局職員一人独占したらしい

彼女は 体は元気だから足は速い 少し前屈みになって

キョロキョロしながら トトトトトと行ってしまう

グループに馴染めないということもあるのではないか？

来る一一月一八日（バスで）園外に出る行事があるらしい

「付き添いできますか？」と問われたが……難しい

「それじゃ奥さんには留守番して貰わないといけないかも

知れませんか」と言われた……当然である

（一九九八年一〇月二〇日）

知痛力

「記者のち医者」というある人が言った

「医療者に一定のハンディキャップがあることが

望ましい資質の一つだと思います」と

「ぼけ老人を抱える家族の会」は京都に本部がある

九八年夏？に熊本県支部が発足するとき

その承認に一つの条件が付けられた

「なるべく早く支部長に介護体験者をあてる事」である

痛みを体験することは 素晴らしいことである

人の痛みを知ることができる

痛みには巨大なパワーが潜んでいる

私は自ら体験（注）し 多くの体験者を現に見ている

私の居住する区の年長者相談コーナー・

コーディネーター（主査）の一人は障害者である

私は「知痛力」という言葉を提案したい

（注）①自らの橈骨神経麻痺体験

②家内の老人性痴呆体験、継続中、下降中

（一九九八年二月一日）

偏見

痴呆問題の鍵は 偏見ではないだろうか？

病気？に対する偏見があるから

他人は変な目で見る恐れる しかし人ごとと思いたい

一方家族は恥じる隠す ひとりで頑張つて共倒れになる

お手上げになった時は もう処置なし

小さな恥を隠して 大きな恥をかく

地域も困り 行政も病気も施設も困る

手間も暇も費用もかかる トータルで大損となる

氏名を公表できる雰囲気を作りたいが

どこに突破口があるだろうかと みんな考えている

私は 露出し過ぎると言われるほど

何もかも公開してきた 話もしたし書きもした

どこにでも出掛けた パソコン通信にも発表した

そうしているうちに 崩れやすい心が支えられた

我々は貴重な社会資源ではないだろうか？

それにしても しみじみ思うのは

「死」教育・「老」教育が必要だということである

(一九九八年二月八日)

セイ

泰子にとって私が忘夫（亡夫）であることがハッキリした

それを知ったとき 体が崩れそうに力が抜けてしまった

家に帰っても こみあげる涙をこらえる事ができず

天井から下がっているロープに縋って しばらく泣いた

ラジオが何か歌っているが むなし

大里の給食弁当はそこにあるが 食べる気がしない

当面クリスマス準備を急がなければならぬ

新年聖会の準備も継続中だし　その後の事もある

説教テープの文章化は　次々に入力が出来上がってくる

詩作は遊びや慰めではない

戦いの記録であり　発信のデータベースでもある

これに頭を絞るから　崩れやすい心が支えられる

しかし　今は何をする気力も無くなってしまう

ある人は言った「家内が参ったのはまさにソレでした」

「何をいくらしてもセイが無い　と言っていました」と

しかし私がドン底にいたのは　しばらくだった

谷深ければ山高しである……深山幽谷は素晴らしい

(一九九八年二月一六日)

臨終

ある人の最期に立ち会いながら 重大な失敗をした

ずいぶん昔の事だった 教会の長老たちと共に三人で

老婦人の枕元にいた 家族は看護に疲れ果て別室で寝ていた

患者は最後まで近い事が明らかで 大きな寝息を立てていた

明け方近くになって 小鼻でヒクヒクと息をしはじめた

話を聞いていたが 実際に見るのは初めてだった

いよいよ最期だと思つて……息をのんだ

事情は忘れたが 我々は家族にあとを託して帰り

間もなく息を引き取られたとのこと

私たちは夜中じゆう ずっと話し続けていた

気心を知った間柄だから 話し合う事は多かつた

勿論病人を気遣う内容で それも小声でしんみりと話した

しかしあとから聞いた 意識が無いようでも聞こえている

自分から発信出来なくても 感情は最後まで動いていると

あのときは雑談しないで 賛美を歌い聖書を読み

祈ってやればよかつた しかしもう取り返しは付かない

泰子の枕元で賛美三二二、四六一と主の祈りをしよう

その段階になつた 二人並んで写真をとつたら影が薄い？

(一九九八年二月二八日)

デビュー

誰かが「公園デビュー」と言うのを聞いて
なかなか面白いコトバだと思った

幼児を連れてお母さんが 公園の砂場で

ご近所の仲間入りする……という意味だろう

母親でもなかなか難しいが (子育て中の) 父親には

なお難しい しかし男女の役割が平均化すれば

こういう例が増えるだろうという

私は子供を老人に置き換えてみた

介護中の方が地域にデビューするのは 難しいだろうか？

恥ずかしかったって 隠したってどうせわかる事だ

初めから公表して イザとなったら助けて貰おう

出来るうちは奉仕して 出来なくなったらお願いしよう

つまり 立場を交替するわけ

あるカウンセラーが言った

「ご迷惑をかける事は悪いことでしょうか？ それは恐ろしい

考えに繋がります 健全者？は障害者にかかわる事によつて

多くの事を学びます」と……私もその通りだった

(一九九八年二月二八日)

はだか

「私は裸で母の胎を出た　また裸でかしこに帰ろう」……
旧約聖書に登場する預言者のコトバである

……泰子はいま裸で帰ろうとしている

ベッドの横にはかなり大きな物入れ（棚？箱？）がある

先頃までは　僅かだが着替えや私物がそこに置いてあった

しかし　今はキレイさっぱり　何も置いていない

全く管理ができず　戸惑いや異常行動のもとになるからだ

味わう事もできないまま食物を口に入れ

着せられ 脱がされ 拭かれ 洗われ……

戸惑いのうちに徘徊しては ベッドに上がり降りするのみ！

しかし終日無言 ひとのコトバもなかなか理解できない！

枕元に小さな人形が置いてあるが 楽しむふうは無い

賛美歌を開く事もない コトバの無い世界にいるからだ

「赤裸」では言葉が足りない 何色の裸と言えようか？

過去も現在も未来も 有形無形の持ち物も

人間関係も 夫も 一切を失ったこのハダカの凄まじさ！

しかし遠からず状況は変わるだろう 主の憐れみを祈る

(一九九八年二月三〇日)

冷気

今年も 正月休みのあいだ外泊はしなかった

帰宅しても会う家族がいる訳ではない

家はすっかり改造されて 彼女は戸惑うばかりだろう

だいたい 彼女の頭から自宅も家族もスツカリ消えている

そのかわり「こちらから面会に行こう」と毎日通った

急に寒くなった大晦日 八幡での用事が長引いて

園に着いたのは(午後) 七時だった 泰子の姿は無かった

大食堂ではテーブルを寄せて 紅白の観覧席が作られていた

泰子は正月が来る事を知らない 紅白も知らない

暗い寝室に入ると フトンをかぶって天井を見回していた
チラツとこちらを見るが 反応は無い コトバも無い

アレッ今日はピンクの靴が二つキレイに揃っている

珍しいこと靴を脱いだんだろうか？ と足を探って見ると
両足とも白い靴を履いていた！

「最近昼間も寝ておられる事が多いです 進行が早いと
思います ハダシ（靴下）で歩いていることがあります」
と担当寮母さんが言われた

ある時は片足だけ靴を履いて ピタパタと歩いていた！
ホームの室内は温かいが 私の心には冷気が吹き込む

（一九九八年二月三二日）

始末②

一九九八年大晦日の夜 事情があつて遅くなった

外はかなり冷え込んでいるが ホームの中は温かい

早く寝ている泰子は 私の顔を不思議そうに見上げる

小声で賛美を歌い 「主の祈り」をした

なじみの「What a friend」と「Jesus loves me」である

泰子の口はほとんど動かない 言語野が壊れているからだ

アツどうもおかしい いつもの戸惑いモジモジとは違う？

上半身を少し起こそうとしたので 背中に手をかけると

シーツの胸（乳）のあたりに 直径五・六センチのシミ？
お尻よりずいぶん高い位置？ しかし身をくねらせたら？
色もウンチより濃く むしろ赤褐色に近い……

しかし食物の色で変わることもある……ヒョットしたら？
触って見るがあまり濡れていない匂いも強くない……が
ずーっと下まで広がっている やっぱりそうだ！

寮母さんは「まずカラダの始末をしましょう」とテキパキ

何となくキマリ悪そうに ニコニコしながら股を広げる

フトン・シーツ・防水布からマットまで交換して頂いた

看護婦さんは「少しクスリを考えて見ましょう」と言われた

当直職員の方々は大変な年越しである ご苦労さまです！

（一九九八年二月三一日）

乾燥

樹木が部分的に損傷すると ヤニが出て傷口を覆い固める
しかし真二つになるような大怪我の場合はどうだろうか？

私と泰子は裂かれたのかも知れない

ナマ裂きだった 痛かった 樹液（血）が流れた

しばらく痛みが募った 夫のことが分からなくなった時

絶頂に達した 激しく泣いた 力が抜けてしまった

何をする気力も無くなった……

それも一ヶ月ぐらいだったろうか？

ズキズキする痛みがなくなって傷口が乾いて来た感じがする
全く無視されれば かえって気楽な面もある

しかし痛みが消えた訳ではない 奥深い鈍痛となった
弱りつつある私には コタエ方がひどくなった

「介護に絶望してはならない もうしばらくの辛抱だ
なぜなら 状況は必ず変わるからだ」……と言われる

私も様々な状況・動作について 体験して実感して来た

だが この変化はあまりにも重い……あるいは

もう裂き離されたかも知れない？ しかしすぐには枯れない

(一九九九年一月一四日)

死別演習

泰子はまったくものを言えないから

私をだれと思っているのか 確かめようがない

広い食堂を見渡し 泰子のそばに行つて座ると

ちよつと表情を動かすが ほかの人にするのと変わらない？

そばにいても 会話ができる訳ではないし

電池カミソリで口の回りのヒゲをそると

うるさそうにして 時にはおしのけられる

チャンスを見計らつて日付入りの写真を撮る

写真を残すことが良いかどうか　ちよつと考える？

彼女は私をまったく無視して　ツト立上がり

(エンドレス回廊の) 徘徊に出かける　歩き方は早い
なるべく同行するが　毎回はともついで行かれない
その時は　ガラス越しに(回廊を) 見渡して目で追う

「いま私が姿を隠したらどんな態度をとるだろうか」と考え
サツと物陰に様子をうかがっていると……

まったくそ知らぬ態度　いま誰かがいた事も忘れている

一時はつらかった……しかし今はむしろ安心である

これで安心して死ねる……死別の予行練習はすんだ

(一九九九年二月六日)

老人

「老人は／死んでください／国のため」という川柳は
七十代の老人が 世の風潮を風刺して作ったという

「年よりは生きてちや悪いみたいね」というツブヤキが
ある一方「生きてて悪いか」という老人の反応もある

高度成長時代 猛烈社員たちは

非生産的な人間は死んでしまえ という勢いだった

年寄りや障害者を切り捨てる社会は

若者や健常者にとつても薄情に違いない

アブクがおさまって 次第に本当の事が見えて来た

いい機会である 生き方を見直そう

一三〇年（二千年？）の常識の呪縛を断ち切ろう

人の為と考えているうちに 舞台は回って自分の事になる

右がよいか 左がよいか はたまた中道がよいか

いや交替できるシステムがよいなど……いろいろあるが

実はもう一段深い部分が問われているのではないか？

これを先送りすると 次第に壁は高くなるだろう

（一九九九年二月一三日）

省力

読むことも書くことも 聞く事も話す事もない生活

食膳に向かつて どうかすると食することも忘れる

そのうちに生きる事も忘れるのではないかと思われるほど！

そして とまどいながら果てしない徘徊を繰り返す

小声で「ドーブル」と言い続けているが日本語ではない

命のうめき……そしてこれが唯一のコトバ？である

一・二周するたびにベッドに潜り込み 二・三分すると
アレツという顔をして起きだし またあてど無く徘徊

食事時間もオヤツの時間も分らないから

寮母さんが呼びに来てくださる事が多い

肉体は元気だから 歩く速度は大体において早い

できるだけ付いて行くが 全部は同行できない

彼女はそういう私を全く無視してグルグル回る

寝る時はほとんど靴を履いたままである しばらく前まで

脱ごうとする気持ちがあつたが 今はその素振りもない

私も一々脱がせないようにした……もしそうすると

起きだすたびにハダシになるからである

この省力は決して楽ではない

(一九九九年二月一九日)

悲しみ

一人暮らしにも慣れて来た

いろいろ工夫した

各所を大いに整理した

たくさん物を処分した

便利なように改造した

新しいものを作った

次第に泰子のものが姿を消した

ソフト面でもいろいろ試みた

新しい生活リズムが出来つつある

何でも同じだが イザとなれば

相当の事がやれるものだと思う……だから

あれこれ考えるより とにかく一步踏み出す事だ

こうして一人暮らしは七百日を超えた

今日も何事もなく過ぎて行く……………

それが悲しい！

(一九九九年三月二〇日)

摂食

ある日の夕食はカレー（福神漬）と海草サラダだった

「今日は御飯ばかり食べようだったって食べられない」と安心しているとはシで白い所をつついて御飯ばかり食べている

スプーンを持たせようと思うが聞かない

寮母さんがずっとハシを取ってスプーンを持たせると

やっと食べ始めた……やはり白い部分ばかり選ぶ

彼女は若い時からカレーの食べ方が変わっていた

まず全量を混ぜっ返して均等にしてから食べ始めるのだった

しかし今はまったくその気配はない

カレーとの境界線に近付き一緒にすくった　しかし

「アツこうして食べるとおいしいな！」とは感じない

無表情で黙々と口に運ぶ……いよいよ少なくなると

お皿の端に押し置いて　指でつまんで食べた

海草サラダには気付かないから皿を並べ替えて押しつける

私が食べさせた方が早いが　なるべく自分でさせねばと

声は掛けるが手は出さない　全介助まであと一歩か？

やっと食事がすんで歯を磨いてもらう　一人では磨けない

歯に隙間がふえて食物がはさまるようになった

歯科（来園）検診を受けているという　外も内も濃霧！

（一九九九年三月二六日）

男やもめ

「男やもめにウジが湧き女やもめに花が咲く」と言われる
私はなるべくウジが湧かないように工夫する
掃除を一生懸命にするより 生活改善をして

※ゴミがたまらないように

※ゴミが目立たないように

※掃除がしやすいように……考える

改造・工作はお手のものだから……

「アイデア・ノート」がいつも手元にある

日付け・要点・デザインがなぐり書きしてある

何冊目かこのノートには 五百数十枚のアイデアが記録され

ほとんどは実現している これは私の頭休めでもある

不潔でなければ 少々のことには目をつぶる

「垢で死んだ者はいない」という諺もある

見た目も 気分も 常識さえも考えない(事もある)

あくまで実質的な生存・生活の質をとる

一人暮らしのサバイバル 究極のQOLである

なかなか人に言えないような事もあるが

むしろその方が大事なことも知れない

貴重なノウハウである

(一九九九年三月二七日)

悔い

父を送ってから もう四〇年になる

胃癌・肝臓癌が手遅れで手術後いくらかも持たなかった

母は三二年前 気が付かない間に息を引き取っていた

形は違ったが いずれも大いに悔いが残った

今また妻を送ろうとしている

この別れは長い時間をかけて進行中である

もちろん私が先になるかも知れない……その時でも

最後まで悔いが残らないようにしたい

いま彼女は私に会ってもほとんど無視（分からない）である
ものは一言もしゃべらない……これは非常につらい！

「分からないんだったら（面会に）行っても無駄だ」

と思いたくなる事もある……実際に！

しかし百分の一でも千分の一でも認識力が残っているいると

信じて園がよいを続け 呼び掛けをし 接触到努めている

ニコツとすると「分かったのかな？」と嬉しくなる

ある人は「分かっていますよ！」と慰めて下さる

女性の会のある仲間は

「行かないなんて言ったら私が怒ります」と言う

………本当のことは神様にしか分からない

（一九九九年四月一九日）

扉前の別れ

「帰っていいかね　また来るからね」と言うと

小声で「ン」と言うが　分かって言っているのかどうか？

その証拠に　表情も変えなければ動こうともしない

時には　ツト立って徘徊に出かけてしまったりする

一昨年まではペアの人と一緒に入り口まで送りに来て

そこで三人でお祈りをして別れていた

その日　寮母さんに挨拶をして扉の前まで行ったとき
ちようど泰子が扉の近くに来た　徘徊中の偶然である

私が暗証番号を押して扉を開けたが 知らん顔

扉の外をチラッと見たが 出ようというふうでもない

私を見てアツと言うでもない 私は彼女をじっと見ていたが

扉が閉まる前に横を向いて行ってしまった

このごろ彼女を呼び止めるとき オイ ヤッコ チョット

などと言うより 寮母さんのように「伊規須さん」と

言ったほうが反応するようだ それも「伊規須」という

名前を識別している訳ではなく 雰囲気を感じてらしい

最近扉の中央帯に半透明のフィルムが貼られた

そのように 彼女の世界は次第にかすんで行く

(一九九九年四月一九日)

死に方

◆ ロングホールをスリーオンして二米のバーディーパットが決まった瞬間グリーン上でぼったり……

◆ 満天の星を眺めながら露天風呂でゆったり流れ星を見ていてスーツと意識が遠くなる……

◆ 恋女房の手作り弁当を持って好きな山登り 山頂に座って弁当を開き缶ビールをグイッと一杯 厚焼き卵を頬張った

瞬間 目の前が暗くなる……

◆ なじみの焼き鳥屋で豚バラとつくねと熱燗だ 一杯飲んでつくねのクシをほおばる そのとき胸がキュンと来る……

◆イヤイヤやっぱり家で寝たまま起きて来ないのが一番だ

誰にも迷惑をかけないから……等々

いろんな人のご希望を聞いて笑った　いずれにしても

一人では墓に入れないから　誰かに迷惑をかけるだろう

私の郷里のある老婆は　どこから帰って来て

「ああ疲れたドッコイショ」と切り株に腰掛けて

そのまま息を引き取ったという

みな短時間で死にたいだろうがそうは問屋がおろさない

現実には瞬間死から緩慢死までいろいろある

その節はよろしく願います

(一九九九年四月二〇日)

片思い

「磯のアワビの片思い・一方だけから恋い慕うこと」とある
片思いには第一期と第二期があるかも知れない

私達の第一期が片思いだったか思われなかったか分らないが

第二期の今は 私から言うと言つて片思いであり

彼女から言えば片忘れである………思いはもう無い

私の片思いは彼女に通じず 彼女は夢世界を浮遊し

彼女の片忘れは 私を生殺しにして夢を見させる

最近でも不思議な夢を少なからず見るがメモの段階を出ない

空港で飛行機を見送るとき

次第に小さくなつた機影がやがて雲間に隠れるように

私は彼女を仰いでいるが彼女は機上で私を見失つてしまった

最近の商用航空機は（時速）五〇〇ノットぐらいだろうか

それなら秒速にして二六〇メートル！

私たちの別れは緩慢なようだが 文字通り飛ぶように早い！

もし双方が同じ速度で反対向きに飛んでいるとすれば

秒速約五〇〇メートル 期間は丸二年を過ぎたから

三一五三キロ離れたことになる！

（一九九九年四月二〇日）

反省

【回顧・点検・反省】

- ◆ 献身が無理だったのだろうか？
 - ◆ 人間関係が無理だったのだろうか？
 - ◆ 肉親（殊に、親しい姉妹）の死亡が重大なキツカケ？
 - ◆ 夫婦の対面が不十分だったか？
 - ◆ ある線までは互いに持っている事を前提として付き合おうとした。二人で創造する努力が欠けていたかも知れない？
 - ◆ 役割が不足していたのだろうか？
- （役割が不足したから痴呆になったのか、痴呆になったから

出来なくなつたのか？ おそらく後者ではないか)

◆彼女が覗き見た？孤独の淵はどんなものだったか？

◆無意識のうちに孤独を避け、感じない状態に逃避した？

(児童・生徒が登校拒否するとき、本当に腹が痛くなる)

◆ある種の甘え？つまり逃げられるから逃げた、何もかも投げ掛けても大丈夫と信頼した？ 勿論、無意識にである

◆遺伝子レベルの要因も大いに疑われる

◆【ある程度進んでから】

◆白内障手術入院の際、病院の無理解により急速に悪化？

◆一九九七年春までは在宅介護を続けたが、夫が仕事を続け

ながらであるため、十分に届かなかつた？

◆夫の無理解により強く叱責した事も悪化の引き金に？

◆夫の無理解により強く叱責した事も悪化の引き金に？

(一九九七年七月二日)

式と祭

誰かが「爺ちゃんの葬式は孫のお祭り」と言った

三・四歳の幼児には 死の意味がまだ分からず

いろんな人たちが集まることを むしろ喜ぶだろう

しかし そこで繰り広げられる人間関係を通して

経験を積み 成長してゆくパワーを持っている

しかし加齢による老化・疾病は 人は三・四歳どころか

二歳以下？に変えてしまう そこには下降パワーがある？

老人力と言うべきか？ 痴呆力と言うべきか？

私の葬式があつても 泰子は誰がどうなったのかわからない
話しても 分かったのか分からないのか確かめようもない
一言も一声も発することができないからだ

夫とか結婚生活とか 彼女の頭から消えてしまった

世界はすっかり霞んで 霧の底にトマドイの渦が幾つも

巻いている……それもこの頃はボンヤリしてきた

忘れるという事も分からない 時々だれか（寮母・寮父）が

来て引つ張ったり剥がしたり 洗ったり拭いたりされるまま

食べる事も忘れ お茶を箸でつまんでもうまく飲めない

夫どころか 生きる事も忘れるかも知れないブツブツブツ

（一九九九年七月一九日）

青春

新聞歌壇を眺めていて フト一首に目が止まった

「逝きし夫を大塚さんと呼び合いて友と語りぬ青春戻り来」
語り合っている友人とは どんな関係だったのだろうか？

泰子は旧姓を「東」といった

教会の一時期を画した女性だったかも知れない

両親は教職にあつた人である

実姉は薬局チェーンの会長夫人だった

実兄は牧師だった

四人兄弟の場合両親の愛情は四二〇四の比率になるそうで

○（次女）が一番たくましく育つと言われていた

その泰子のことを語り合える人も少なくなってしまうた

これもあれも 巻き取られるロールフィルムのようだ

私は青春に戻りたい訳ではない 昔が懐かしい訳ではない

体が少々弱つても今が青春 前途洋々いよいよ意気盛ん！

晴れ舞台は まだまだ先かも知れない？……

イヤ先と言うより 現在の毎日がロングランの真剣勝負

楽ではないが これほどやり甲斐のある仕事（人生）はない

もし許されるならばその日まで全力疾走……すると

自動的にPPPKペンキペンキペンキとなる ならなくても一向構いません

（一九九九年七月二五日）

三年

三年というと 何となく一区切りついたような気がする

桃・栗三年 柿八年 梅は酸い酸い十八年

枇杷は九年でなりかねる などと言うが

これは実を結ぶまでの話……

「女は強いが男は三年」なんていうのもあるらしい

こちらは 配偶者を失ったあとの余命を言ったもの

平均寿命には性差があるし 夫婦の年齢差が数歳あれば

妻が十数年残る計算になるが 当然のように「女は強い」

などと言つては申し訳ない

一方 男が残った場合は 極端に短いということらしい
全く根拠のない話でもなさそうな気がして来た

しかし一直線ということはない 常に支えられるからだ

泰子も動きが少なくなつて 一段とレベルが下がつてきた

園も三年になり 事務室にもいろいろ変動があつた

寮母さん看護婦さんも入れ替わつた

入所者についても異動や死亡の情報が聞こえてくる

劉廷芝「年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず」

(一九九九年二月六日)

三歳

新聞のコラムに 「母の三歳の誕生……」
とあるのが目にとまった

三年前に大病から生還した人の話だった

それならうちは痴界の三歳だろうか

いやいや もっと年がいつている筈だ

正確な誕生は分からないが

八・九歳にはなっているだろうから

園でも年長者のほうに違いない

痴界ではふた桁になる人は少ないのではないか？

泰子も最近は何もせず いつもじっと座っている

それも広い大食堂（訓練室）からちよつと外れた場所だ
何を言われても反応ができないので

元気な入所者から疎外される事があるのではないか

動けなくなれば やがて動けなくなるだろう

ケガをしたり寝込んだりしないように願う

入院したら一挙に痴呆が進むかも知れない

それにしても徘徊最盛期間はどのくらいあっただろうか

「状況は変る暫くの辛抱だ」と言われるのは本当だった

（一九九九年一月六日）

たくましさ

物音一つしない

散らかった 暗い部屋で

たった一人

冷たい弁当を食べていても

「ああ わびしい」なんて言ったら

生きられない……………イヤ

決してそんなことは言わない

なぜなら 私は一人ではないし

自分が頑張つて

生きている訳ではないから……

泰子がいなくなつて この三年

ずいぶんたくましくなつたと思う

困難にあつたことは

私にとってよい事だつた

「痴呆も悪くないな」としみじみ思う

しかし……しかし……

限りある力は 波をうちながら尽きようとしている

低くなるばかりではないということだが

(一九九九年二月八日)

降段 X

遅い人が数人 まだオヤツを食べている頃だった

今日のオヤツは ふかし芋と牛乳だったらしい

泰子は真つ赤なスモックを着て テーブルから離れた所で

膝の上に小皿を置き お芋をつまんでいる……しかし

どうしてよいか分からない……戸惑っている

寮父さんが走ってきて「こうしないとダメかな」と

お芋の皮をむいて下さる「はい」と手を握って口の方に

持ってゆくと アフツと一口しかしイヤイヤという感じ

表情は全くなく 芋を持つ手がブルブルと震えている

「指の震えが出てきました 徘徊も少なくなりました

食欲も落ちました しかし動かない割にはよく眠ります

夜間二回排尿誘導しますが成功する事もあります」……

「ご迷惑をかけます よろしく願います」と頭を下げる

手の震えを聞いたとき かなりのショックを感じた

コップを取り落とす程ではないが 徐々に進んでいる！

「初診の時 五・六年前から言われたのを加えると

かれこれ十年になります」と言うと 厳かなお顔で

うなずかれた 顔見知りの入所者も次々に替ってゆく

(一九九九年一月三日)

外出支援

「泰子さんはクリスマスやお正月に外出されますか？」
とX寮母さん

「園からお尋ねがありましたか『ない』と返事しました

帰っても会う人がいる訳じゃないし クリスマスや

お正月は（教会の特別集会で）むしろ忙しいんです

できるだけ面会に通いますので 園でよろしく願います

だいたい私を見ても こんなふうで喜んでくれません」と私

すると寮母さんは言った……………「イエ

泰子さんと私が外出する事は許されないだろうと思います
しかしご主人と泰子さんが外出される時に

私が（私的に）同行するなら問題ないと思います」

「エッ？……ワーツ（涙！）有り難うございます

先日の衣服のことといい 外出のことといい

そんなにまでお心をかけて頂いて 有り難うございます

こんなこととてあるでしょうか……暮れやお正月には

ご自分のおうちも忙しいのに 私どものためにそんな事を」

何度も何度も 心の中で頭を下げながら帰った

運転も軽やかだった 泰子の心にも灯がともってほしかった

（一九九九年一月三日）